# 和歌會席作法

秋冬

13
1132
2

門 1 13
1132
巻 2

和歌山県立図書館蔵書印

秋の部
秋 三
新秋 三
七夕後朝 五
女郎花 十
鴨頭草 十一
秋草 十一
露 十八
松虫 二一
鈴虫 二三
促織 二四
轡虫 二六
秋風 二七
早秋 二
七夕 四
萩 七
朝顔 十二
龍膽 十四
葛 十六
小雀の鴨 十九
蟋蟀 二三
茅蜩 二五
秋風 二九
初秋 六
乞巧奠 九
薄 十二
桔梗 十三
草花 十七
茅萱 二十
蛩 二十
鹿 二五
暴風 三十

秋夕 三一
秋晩雲 三二
的迎 三五
新月 三六
待月 四十
立待月 四二
在明月 四六
添丈月 四六
雁 四六
擣衣 四九
殘菓 五二
擣 五六

秋夜 三二
秋雨 三四
弱引 三五
夕月 三六
十五夜 四十
居待月 四二
曉月 四三
惜月 四六
鴫 四六
九月九日 五十
紅葉 五三
擣 五六

秋興 三三
秋野 三六
二日月 三八
停午月 三九
小初夜月 四一
北日月 四三
深夜月 四三
九月十三夜 四四
霧 四七
菊 五一
柘 五一
秋霜 五一

惜秋 五七
九月雲 五八
冬の部 五九
初冬 六二
雲 六三
雲 六五
氷 六八
雹 七三
殘丁 七七
雲 七七
夕雲 八一
行鴈雲 八二

送秋 五七
殘秋 六十
蔣菜 六一
冬野 六四
冬樹 六六
冬鳥 六九
鴨 七四
霙 七五
深雲 七九
山雲 八一
海色雲 八三

湖雪　　故里雪　八四　屋雪
山家雪　　山居雪
梢淡雪　八六　鶯宿　　八七　炭竈
薪　　八九　煙火　　九十　寒依節舎　九一
五節舞　　神樂　　九三　早梅
待賢　九四　菜花　　九六　除夜




和歌事始　山下雪　春の部

## 秋の二

秋

秋といへば　秋されば　秋とこそ
秋のそら　秋きぬと　秋さむく
人の秋　秋の初　秋のくさ
秋きり　秋の日影　秋の雲
おさまる　西こそ秋　なつかしき紅葉
秋のつき　ふつくりの秋

立秋　秋くれば

立秋八七月の節をいふ形なれども七月初旬としてよめる事
つねて立春のこころえよ如斯

久保より秋　秋のいろう　秋されハ
秋ハきよう　いつく秋　あおきさわ
風うつる　風の名にも　秋のふもと
一むらの　秋の名付け　いつくとは
掛のしたき　来る秋しるき　秋のそうめ
波のそのうも　萩のちるを　秋の風
きおくみの名　秋ハきぬ　秋ハきぬ
秋ハあはよう　秋ハ風　秋ハ風
ゆうさなさ　来ぬうら秋　秋さ礼ハ
古　秋きおくあはよハさやかなこそ　秋さ礼
〃　江の風よりくもるうおよ風　秋のそうめ
屋　おうけよ掛そうおき来ぬうら　秋のそうめをけうそ思ハ　後素



〃　御うも風のうとしく来ぬうら秋うらと　秋さ礼ハ
拾　八重こ詩ちうれうやうの浦ときよ人　恵美
云　萩の花ちうふ夜うの秋が来ぬ　羽恒
屋拾　おうけうふ夜すうしくおうふ八夜の秋のきく　後素
〃　浅茅うくおうふ夜うの秋が来ぬ　恵美
〃　金　とおうふ夜うの秋が来ぬ　恵美
云　秋のおうけきの杜の風よなも　坂門
〃　八重桜うこのゆうよきおうふ秋うの　後素
〃　御うも来ぬ事ふ来てうおうふ秋うの　麻呂
○早秋　○初秋　○新秋　秋のそうめ　そうめの朝
いつ秋と秋うくおうふ日ふ日のうをよむ　初春社
そうふ日ふ日のうをよむ秋のうをよむ

秋のそら　初風
萩のをふ風　きつ秋風
初秋ふき　夕べの初風
すゝひく淸萱　萩の初音

寄虫秋
虫ものこる秋の
秋風ふくね　風もおとろく
秋の夕月夜　夜もふけ
更けの風　芦のをの風
秋ハまて　秋といへる
秋ちかき　秋風ぞ吹
秋めく　萩も白
秋のそら　つゆそゝやる
ふきしほる　萩の末葉
名所よりもてはやす　立田山　秋山　三室山　須戸の海
今きの秋　なをも秋〳〵いつことなく



百八　秋ふるそらかもあらぬ八しまのみやこの秋の夕ぐれ　家隆
千七　今ぞ行の秋の名残ぞ　ふきほしく人の秋風
古　いつせふ衣の下ひもをかへてこそ　後鳥羽院
〃　大ふの秋ふるそらにあらねども　物ごとに秋ぞ悲しきあまのとまやの
〃　物ごとに秋ぞ悲きあまのとまやの　ふきしほる
後　秋風のふくにつけてもまつ人の　ふきしほる
〃　松虫の聲よりおくる秋風ハ　ふきしほる
〃　秋ふけぬ鐘もなき秋風のまくずの　子至
指　名所ぞとしらるゝ秋の初音を　寄虫秋
〃　秋ふるさとの山もとゝ　秋風ぞ吹
六　初秋のそらの雲ゐにつゝ衣　秋ちかき
〃　秋ふるさとの山もとゝ　秋風ぞ吹

○殘暑　なごりあつさ

秋ちかくなりてほどもなきあつさをいふ

やうやうとなごりもうすき　のうぬはつる

夏のおもかげ　あきあんぬ　あきとるる

秋あさし　なようてそよ　秋のふし　秋きてもれ

ぬきうつぬる衣　風をまつ　秋まくも　あとうのめく

あつきり哉　清水秋瓜

ゑ　秋はきぬ新よる八ばかりなる八萩のうら葉　葛赤

旨　梅風の雨もやうやうぬきうすき注糸をのごひ

〃　秋来てもまだひとへなる衣をまよひ　き隆

〃　岩間よりもる清水をまかけく父子むれの秋の風八　若宗

秋来ても松の風をおもふ夏を忘れ一法そうう哉　宗春



○七夕　なゝあそのよ　ちあそのゆふ

○乞巧奠　きこうてん

七夕をまつりてむかしあやまつたるてを撰て

言掛ものゝ文字ものゝ織女と云ふ八男の称

ひこぼし牽牛ともいふ　犬ころ　ほし合の空

あまのかわ　天の川　天の川原　天の岩戸

天の安川　天の岩舟　あまの川そい　天の川ばた

ゑ八一　ゑ八の浪　ゑ八十の舟橋　ゑ八十瀬舟

とゝの浪り　八十の舟橋　波のうき橋　天のうき舟

八十瀬舟　流れ玉巻　天のかわら　ふねのうへ

かちまくら　夕月夜　ふなうま

一枚つま　はかまも　きの衣　きぬのうら
まれのあふ　こけの衣　天津ひもとく
名張衣　よハの下帯　ゆふつづら
妻のもち　いつそ衣　七の緒琴
むの琴を　妻のくもり　琴のしらべ
名うしの名　さらひのみ　多白の糸
掘の七絃　掘のくちなし　きぬのとも
はりまの糸　きのと八月　秋の初花
衣の墨　り合のそ　萩の花
尾そ礼　菅花　なでしこの花
若き海　釣うみの名　女郎花
秋のひと夜　妙のとりや　天の名抱



秋あさ風　きの色沙　月の雨
初もみぢ　ゆふつづ　星の雨
ゆふお風　よつ礼き　月ひと男
秋風　月ひと男　みどり草　秋さら衣

名所そへ河内の天礼川伊勢の空なるふりみてよめる
天八秋風の吹ぬよハつゆそ玉ぬく　住吉
〃十夜風のふきつるよハそ門閉て　法橋宗
〃ふるさとハ秋風ふきぬ一村の
〃天の川きりたちわたる秋風に
〃秋風のふくとよそに見ハやら
〃その川ぎりの名の秋風を
〃掛そへて五百禄そおる本の秋さら衣誰ゆふみん

古　来て更衣ハてよひ天の川雲もうちつゝもうちもうちん　佐久彦

〃　天の川名をうつをかるよりて世ハやたれくつえの杖をつも杖〃

〃　久くもれ天の川原のくしきふみつゝもくよ〃

〃　秋されハ川霧つゝて天の川かくしもあへぬ秋のわたり〃

〃　秋風ハ吹ゝ吹ゝ天の川波のたちのこそまく　雲之

〃　秋風ニ衣の袖ハ天の川うそ風ハ吹ゝ雲ハ行ゝ

〃　あいのまゝいひつゝて天の川そてたゝくもむ　佐久彦

〃　なぬれのまゝ夜ふけぬ天のかそ数ゝつゝく　羽恒

〃　めつらしく逢てわかれハ惜ゝ物ゝそ有ける　仔有

○七夕後朝

　これくの夜つゝもふけぬる雲之上ゝ

　久さの袖　立浪てその川原

巻ノ二

あるぬるれ　かへさのまを　笑の雲

つゝぬるの衣　ねのもゝ原

あれもきも　天のとわたる

ふたひのくもゝ　風のまを

つゝきつれ　彩子あそて

古くもゝ冬ゝ人今斗のきみまをそハつゝ結ゝつゝ　左衛

後　彩子ゆくゝなゝめ衣のえもゝ立つゝ　雲之

〃　天の川ゝゝ人ゝもおも渡えぬ別とおのゝ物ゝら　佐久彦

〃　秋のおのれきおをなる指ハくゝぬきにそまゝつれ　羽恒

古　なれそれゝつゝ仕天の川

今　天の川ふむ物のゝれハかへされ物ゝ

句　くゝゝゝハ天の川雲立ふれ物ゝ

○荻　ちくらをき　そよ風を
おとづく風をまちてよめる又おとづくをよみて風ちぎれ雲もとゞこほる
くもまのそれあきをとも荻のそよ
ぐもまちはるこゝろをなとゝもよめり

荻の一むら　荻ばら
荻のした露　荻のうら風
荻のそよ風　荻のまろやけ
山下ゝ荻　あれ〳〵の荻
かき根の荻　荻のもと
荻の初嵐　荻の下葉
荻の枯葉　おもてうら
おそよく　おとづるゝ
荻のあし　秋風のみ
そよくさし　松そよく
風の妻戸



風をまちつゝ　まこと荻風
おとづるゝ　風うなり
笑しみそめて　ねさめうら
風よわたる　面のまろやま

名所　難波潟　いせの濱荻
五百秋風のいせの濱荻おもて靡くなり
〃十首（かも荻のまろやき秋風の
後　いくしほ越ゆやこの荻の中つ風の
〃　秋風のよつけてもとゝのふ小荻原
拾　荻のそよくまこと秋風の人ならねみそぢ
六　いつも夕風とゝきけと荻のまろやを
〃　秋風の荻のまろやをふくまこと秋の妻戸を荻ふく風

反故はうごとに見ひ人いまもせくく萩の葉ふく風のまをまつ小太を
〃 萩のそよ人いまもせくく萩の葉ふく風のまをまつ小太を
詞 萩のそよ人いまもせくく萩の葉ふく風のまをまつ小太を
千 物こそあれ秋のうしろや萩風吹ものこそあれ秋やあるらん
〃 書よりも筆にそしるき秋のうしろや萩風吹ものこそあれ秋やあるらん
○萩 こそしき 秋いきそ
萩を結びて書そふあ小萩くりみちひきそしたいあ小松を
ひそひそ小くそほていへそ
を挑灯のもし荻の葉こひすそ
秋萩の紅 まそ紅
萩そ萩 古枝の萩
萩の下枝 萩のまき



萩のうへ 萩のあそひ 萩を小書
萩の下折 萩のうへ 萩のうへみん 萩のうへ萩
萩の下 萩のうへ 萩のうへ萩
風の吹く 萩のうへ 萩のうへ萩
ひもそく萩 萩のうへ 萩のうへ萩
萩のうへ 萩のうへ 萩のうへ萩
枝そ萩 萩のうへ 萩のうへ萩
萩の下空 萩のうへ 萩のうへ萩
萩のうへ萩 萩のうへ 萩のうへ萩
名所 春日野 高圓の野 萩のうへ萩
宇治川 萩のうへ 萩のうへ萩
五十 秋風のふくのやうにわれもわれもと萩をうへ 侍人の書

〃 白露をとゝのへおきて萩の枝を引き
〃 八 こぼすなの雁の玉づさ書つらねかきもつけんも おお
〃 十 萩風の涼〳〵きのふけさ吹ゆれ萩のふるえも 後人歌
〃 又てふ虫の我袂とひ萩が枝をまくらにねぶるめり 〃
〃 廿 ふる人の種つる萩萩の花ちりぬやおお
〃 廿一 まち兼てふれひく萩風吹そふるえ 後人歌
〃 廿二 たゞひとのまがきまで又てふ虫の萩をまくらん 敏行
古 萩萩のもとつかうる物のをおしへのまがいやるくらん 敏行
〃 假萩の十枝よそうるまでにうれしきものゝ名にはつきけり こてる
〃 萩の露あやぬきとかゝる枝をみよ 後人歌
〃 萩をきるみつ夜ふかくうちひたる
〃 萩の下葉うつろひぬれ〳〵萩の下葉うつろひぬる
後 萩萩の枝をとをゆくに雨雲おくれけり

〃 御ゆきのつゞきおほくよみあへる萩萩 ほ
招 寄けてふ夜はかぬきぬるもの萩萩 ほ
〃 うつろひぬまでにをきて萩萩の露 新拾
六 萩萩をみつゝ秋をつゝ萩萩 伊勢 後人歌

○薄

はすゝきは皮籠のよう志の籠ハ志ゝ木の籠ハ志ゝ木のもれ
ひちひるおもれいろ皮籠ハもる籠の俗ニも利幹ま
俗をもしめおかれいおくもの又ともに
とハ籠の穂もものゝ屋ゝ紙くれいつゝそ
名すゝき いとすゝき 一むらすゝき
和名尓 尾花の和 尾花の名
むらすゝ 穂すゝき 穂ちる

〃　女郎花人の秋のむさし野の
桔　乃水の巻よ句ごまをそれて思ひ
〃　きにもいうあん凡兆
六　女郎花なでうそうそ秋の野を
○蘭　そうそう
六　此ほどはらはらと雨もよふ
つまごよう女待の縁そよめき
めきそね　たうあきうみほそう
きくくれハ　句ふ兵
たうつうち　ゆうれを
いつむうき　かく人のうく
むうしうゆう　はくかなの系



名所　佐保川春雨垣系日　書日哇日　むさしの系
古　わく人まそやまかく芳條うふ秋うふ
〃　ぬきうねもこそ句ふ秋のこたあきう
〃　やうめせ人のうみ芳條うすう
月　系すうきうふうきやうふうう
六　秋風に同ころひの芳條うまでよきかく
〃　野くのうんのうれ芳條うくそうくきくみえうう
金　佐保川のうくいうる芳條うふのまくねうくう
〃　かうようふうきすう系條村のおとよ系のくうう
〃　はうふのうちめやうれ
月　ぬやう詞きうくうれ八卦うそうひう

〃 いつもてうおてみるきり乳すつもの 乳房
きのめよはきこをもみ人約束 乳伊
○桔梗　きちかう
きちかうハそもそもちれハ別よさもむへくもはなれ名おる
はなのひらきとあれと名のこくろれハ大こく物のこまさや
さくよあるまこ野秋を詠よあるこを
古 はきちこ露ハ朝夕のおくる紫をうつるゆく 古幼
拾 あさ人のまきもちこれ花こ名を旬ひもあ 原析つく 幼 はこ
六 秋のつきもこくてこれと又こつるハ春よりうこ歩き
○鴨頭草　ほきく牛
俗こおそのつるみこやそこ名あるおもみゆうこ歩き
ひたれハちこさもおくこうこ事をまこおめ



衣をする　あた紅こる
紅考　紅ち作き
衣こころ　衣体る
万七 月夕に衣を体るこあいこ 余田　うち歩き
〃 月夕よ衣いこち拍らあもの 先こあ死　夕へ八こある
〃 月夕こ衣ハまん約束よめそての夜ハ拍ひあ表 〃
〃十 紅考よ以すきひこ月夕のはてこうもんへく思 〃
伝 つこあ久夕きほる月夕の汁あき急てこれハ十こる 〃
〃 むてうこうこる人よ月夕これ死こと心を杜 〃
○紫菀　しをよ
私名はしとい事とこうよいほ名これまをにと
物の名こてお存くあり又古てく牛こ事行う

古　ふるさとてひさ古里の花をたづねてこゝを折ける　後人
六　なやらもみつるさを八七夕の折をまつ露のそら
〃　うけさもる袖をしぼりてやきあへ風の氣ハふくまし　仔せ
〃　咲もてゝいあとりとゞひをきゝくも秋咲ぬれハ花ハ秋よりあとりとゞひる　〃

○諸艦　まろうむ

秋名えやうさき又ハ氣もいつれもおの〳〵てあの
古　ワやうのあたにしくそうそうる　古刈
枝川よとよとよろこむあろ本いまつめきやうんとまん　後人
六　ふりあふきてをん秋風を陵うろんなるも　おそ
〃　風さみぬるかゝのあまよりいせ
○草花　○秋花　あきうた



秋そのふいかてもあの又ふく秋の野のふようさの五百
さのもれもよろ　ハ子在　小そのふ
ふ咲野へ　ふのひとく
そのよふさ　新おく雪
花のとの雪　花のとひと
ワけゆく　雪のとな
百そをく　雨そく
月のもの光　秋ふく
あるぬ野へ　ほおくの雪
そうく雪　雪おもみ
やうれ虫　ふゆく雨
ふく根ー　自あそう

万八　秋のゝ草ゝ花を折てかきりなき思ひを
〃　萩の花見れば昔もかくばかりちりてしものと
　　もちてる風流のこゝろをよめる
古　みちの国ひらまさ　秋ごとのなみだ
〃　百人一首のうち　秋のよはつゆをなみだ
ほ　枝ながら　ちりぬるみてや秋はもみぢん
〃　ちりぬるをわが身にたぐふ秋の花
指　秋の野のおばなが末の露のまに
仁　いつれをつまむ　古今　秋の夜はつゆをなみだ
〃　秋の野にさもの花ずりうつしもて
ほか　新古今　よそへつゝ秋を　良暹
〃　ちりぬるをわが身にたぐふ秋の花　元輔

〃　つゆやどす秋の野ごとにたぐへてや　古今
〃　あやなくも庭のおばなに　新古今
○容花　ゆれ　かぶき
一枝のかぶきあるゝ花のこゝろ
楼花ちりぬるをわが身にたぐふ又一説今ゝ
万八　百の神ゝの頭花かけるこゝろ
〃十五　月の内に生るかぶきのこゝろ　源人麿
〃廿三　やどりのをゝしてるかぶきのこゝろ
〃　内ながらあるのもりのかぶきのこゝろ
○葛　くずかづら　まくず
花にて紫をそめて布のふるたぬさにかくるのを
かくさゝれもれ袋を見てかくれるをかくれ

夜さよおそく　雪のめさ　いつねやらん
雪のすき風　雪つもれ　雪のこゑ
うき夢をうつ　枕のこゑ　雪のけうとき
風よこころ　雪とこころさえ　光すごしき
雪ふる夜　雪ふりとめぬ　おきこたつ
暁もきの雪　夜の雪　夜をさまをつくよ
風の雪　屋ねうつ
百八杖田うかもをつうもれを夜よりしと雪をる　後人書
〃　明ぬよおけるら雪ふもく雪ふみゆるれうる雪ふ藤　〃
〃　杖の雪のうつ雪のけの水をれ雪の心のいろつくられ　三条
千ワやとの雪ふもち雪ふ雪ふきもるもちうもん　よりうん
〃　杖されハもくら雪よつ門の浅雪そうふそ雪ふうけ　〃

〃　此法の杖風うくく夜のそちくけうく一冊　〃
古　みさふひかさとせそ海北雪ハ雪ふ雪ふ　〃
〃　杖の雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ雪ふ　〃
〃　山田ふ杖のうつ雪ふいなおわせう　の夜ふ少　古岸
夜ワくおふひそしらふきかくつよおきかくく　後人書
〃　杖くうてよふ汁のそこ雪ふくのうん　〃
〃　白ふの杖のふをふ雪ふくうふふ雪ふ　〃
〃　そのふゆて北ハ行うれや雪ふ雪ふ　〃
古　ワせよハ雪ふせのけし我やふ　〃

## ○露霜　つゆしも

これハおとこゑあてさしたる雪の後よまと
ワハりてハ雪をうかへさる雪そそ雪ふそのそをそ雪ふといふ

春ごとにこころくるしくそこひなゆ（ユ）思のすゑにけく忌（ユ）とは清潔（キヨラ）ちるをいふ
きのゆもおもひ出ことはなきまゝとは粗（ソヲ）さゝてはらちるまゝとこそ
にてそけくこゝろおちゐてよみてこそ
万八 はぎをかの本にはなの枝をはぎ萩は葉おひくもものみ物を 文馬養
〃十まこりるに天皇の林山幸しかまし 清人
〃 萩の枝もとをに幸給ふ 同
○小鷹狩 てこな 大とりをみてとりかふを枝をみてもの詠
すめれともこゝは枝ゝ枝ゝくゝみの詠ふへ
秋のうく人 枝をとらう かりくら
詞もて 小雪のよする 雪ふる
もゝくる 秋の末也 雪くるゝ

小萩系 雪ふる
名所 清の歌 添ふ歌 月 栗津うら いさ白川 城中
狩歌つゝふ雪のふるまでおくる 雪雪
〃 かりくのくれは雪ふるまでおくる 雪雪
古 うらふて雪くるまでおくる 雪雪
〃 草のおれふしみのれとみちをかる 雪雪
〃 ふのうこをとくくきゝとふらひ 雪雪
〃 雪にそもと詠すむてこんくのあ 雪雪
長柄秋の雪ふるまでおくる雪雪 え雪

○虫 秋のむし
むしのこゑくる歌こゝろまかれ 雪雪
むしをすくてよむへし又くむしの 雪雪

むしの聲　むしの聲
あさしけき　すさく集之
秋しきる　そらもれく
秋ハの雲や　秋の下
ゆふ日かげる　虫のやう〳〵
秋ともろ〳〵　雲のやう〳〵
ふるさとも　風もみち
寄をいのち　うつろむ
笠のあら〳〵　秋のあら〳〵
陰茅生のやと　蓬もと
うき世を秋　なの系
吟あん　かこち
なれつくそ　行ふ
ふる雛　もの



ふるきのもと　虫のふる
ふるさとの　もの〳〵
秋の夕　八重葎
秋のゝ雲　うれくまる
名所　むさし野　やたの原　入陽　末野　生野　野を名
古ひつる　末つ松山　波こえ　袖に
〃　秋の夕　雲こそ袖よ　虫のこゑ〳〵
〃　物の音　秋ハ　虫の
信　秋ふれハ　野も世も虫の　ゆき
松　おもひ入れハ　ふるさとの　ふる
六　秋風の　吹ハ　袖に　露
某　あれて　ハ浅茅　ふる　虫の

〃 陰茎の根の外皮に包まれた 睾丸
〃 睾丸のひとつ上にしゃえぬいて細くて長くてやわらかき
よ 寄生する虫のもとをおやろけてやくのうん はふ
○松虫 まつむし
まつとよぶ名をひびき 秋を待つ虫
まつとよぶ小松にかかる露も似て 秋待つ虫の声も聞こゆる
まつまつも 松のこまあみ
良すむやうに 仁もくも
名所 阿武山 摂津 昌明寺 梅生 虎変
古松のもと人声虫のおとへいてさらさら 俊人 詩
〃 こゑ 秋のよやつてあつまる虫のひそかなり
〃 松のかぜもまさしき松虫の 詩すること

〃 かみきりのおてつてそれもやうな虫こゝら
俊 秋のうま虫ともなををする虫おろろろ
〃 女郎花もまれまつむし
〃 虫こゑ 秋のうたゝ
指 秋の虫 秋のうた
〃 こゑ今八月の頃
〃 よこせこそ秋ゆるこゑ松虫のこゑ
云 夕されいくまつ虫のうたをきゝ 秋こ
○鈴虫 すゝむし
秋の部よりもすゝむしのうたこそ
詩歌のすゝむしよりもすゝむしのうた

六 杜風や芝生のやとるみさごあんなかつかく〳〵〃
〃 なくもあるさんやるやとるきかれ杉をおもひきくのとみてもる 素性
〃 杜風のやくかけはきあけくけうくしたる芝のあとかるかるし〃
金 あ」けさやとるなるひくまれてるみ杉の下よ作杉ノ 六条
千 杜のおれよわそれ作杉ちる 超をつるのことるきり作杉 為家

○蟋蟀 きりぎりす

蟋蟀とる高刻きりぎりすとよみてはちくくとの
ひくくくく咽ふ名ちるきりぎりすとよみてはちくくとの
口ねて蟋蟀をおもふ古保品本とあれどもきりぎりすの歌
万八夕月夜ちも志ぬよ白露の杉く此夜ろきれくも 坂上郎女
〃 十杜風のやく吹なくきやこの此夜ろきれくも 坂上郎女
かたそのおひくる高のゆふ作杉ちるきりぎりすとよめる
〃 こよろよ村雨ちてきこえるまのるきけ杉作杉にて名 〃

○促織 きりぎりす

様をおるきりぎりすくよろ二村山よみつけそのくる
くさの糸 すて神よる

指杉れいとてきこえるまのるきけ杉作杉にて名 〃

○蟋蟀 くひたてむし

こよろくくよろくよろ弱むこよろみ会 弱ちくて作杉
吟ちひいこよろあるさんやるやとるきけ杉作杉にて名 〃
京 我せこ弱ちくて来ちるきけ杉作杉にて名 〃
旅弱ちくて来ちるきけ杉作杉にて名 〃

○芳蜩　ひぐらし

和ごまる　山のこひ
鈴ふりかひて　まそとはせる
めれて鈴ふる　おのづとひき
指ふれふく　あのまちつき
秋の夜ふく　吹えうる
小みのさみ　山下とよみ
あらねをおく　入るこの夜。
夜ふけの　指ふきとる
ふたふたく　まさ山
鈴ゆく音　うとうとめぬ
雪ふりて　世を杜ふる　笛ふよふる
名所　小倉山嵐　山岸
　　多祖田、　吹上浜

初瀬山系　小夜井山書　読史　通板山系
万八　夕されば小ふく吹山ふもの葉のそよひはけしも　斎明天皇
〃　秋萩の花のようひふくふく秋ふけさ　須重
〃　ふれふれ指ふの山ふの雁のまもみをゆうの　板上帝女
〃　此ふの鈴ふきけふあり引の山をよりふれふる　高指
〃　千山のこい行ふをいふ行山も吹ふ時も　後く考
〃　山もふみもみふくさこいをふふ　〃
〃　かふく雁のこひふれふくも秋みの萩ふふん　〃
〃　幸ふふ行杜萩しのき指ふの萩ふそ　高指
古　杜ふ萩の花吹ふふふふ行ふん　と行
〃　帳のふふ高行ふふふの手をふて　〃
〃　まふふ指ふふふふふふふふふ　羽昭

〃 山里は秋こそことにもの侘しと
〃 秋萩とふことみせて咲く萩の
及 なまきけとおそふ折よりうつろ
猪 秋風のおとてふるかのをみ
〃 おやまねこえの山と伝ふ
六 秋萩をかくみて咲く庭の
〃 杉むつれ小牟田の萩の
〃 鶏の古をこなてなく庭の
〇電 いなつま
桐まハ雷を雷ともいふ仮
空のけしきをもれてハ桐の
つくとらるる電のえみ

ハーのおくのふるさとも七ツ
桐葉おもへ 桐葉ちれ
時してふ てふもなし
やまもはてぬ ほのふるる
かくる桐葉 桐葉を
ふのそふる 時の桐葉
かをふるる 夕月夜
ふめえ やふもふえて
ふ桐ようふ
古 秋のふれ柚のふをてふ桐葉の
ふ 桐葉ちれ人のふとふ
〃 ふにめる秋ふ桐葉ちれ

よひの桐葉 ふくいちる葉
ふえふえさん かくふ桐葉
ちりてふのふく 木のふも見え
夕ふのふく 夕やみ
ふきふみて ちれくふ
村やはふひ 夕やみ
ふふめえ 月のみふえ
ふのいつく

〃 穀雨おくてのわせを植ゆるころ（穀雨 四月二十日頃）

〃 世中をほろほろと鳴く秋の田を（秋田 雁）

〃 雲霧のたつ海辺の雪の朝（雪朝 雪景）

〃 新やとあるじよろこぶ秋の雪（雪朝 雪景）

○秋田　あきのく

六七月かりおさめもちをわせ八月ふり取もちと

おくて又おくれともいつすくなくとも早稲もち晩稲もちまでのほま

をも秋田をもるなりをもよろづ種ハ早稲の種と

わさ田　ふか田　みれん田

門田　小ふか田　小田　ふか田

みぞ一ろ小田 秋社の題　そら一ろ田二歌と十代ふ　いち一ろ小田　狭田

ふか田　陸田　稲なり名ニ付

植よいつる　植れそろふ　かつ一ほ前は

なりその稲　かつ一ほを一稲と有

稲のみな　植もその風　かつてふく

庵ち田ま　民のさま楚　ふか田のふく

やつ植　小田ち庵　ふかふかひく

ひろのみ繩　高杉歩く　山田の秋

〃そのみ庵　秋のもみち　おもおのふくて

おくさく　ち田のそ庵つ　手ある稲ハ

山のすそ田　ふかふか田　ひつち二まれ之

岩田　田そり引　ふかふか稲

あせの田を　田面の雪　ふかふかれ之

かつての句

五十体をてかの書り子山のとろ〳〵雲りてる　凡兆
〃　岩門はもる田をこれ小さ田のつもれ　〃
〃　秋雨うかの居先々のあをれ小夜ひさし　〃
〃　立てても柿をそれ今あをれ小なりてる　〃
古　ばることてお雷こりへつれた柿をそこきて秋をのく、
〃　ほこりも生ぬ山田をもと旅衣これをの雲りめれぬるほ　〃
〃　鈴奉けおくての山田うそあようき世の母をおりひわ我　母を
〃　歩てもく鶴を見へ秋の田のいちきのそことりへくぼき　鈴收
〃　秋の風よみこれのもれくへ秋のころをたさしとおもん　よ忘
〃　秋の田のうちをけ旅の白をあてみあ衣は雲よめれて　て登
拾　苅て後と山田の稲ばち作ちる雨は我世へりへん　きつる

# 秋風　あさの多

いつくるの湯くいもとみへとてろ
てくすくく秋ふ風八ほうちもく
郎てをうれと秋風のそれ
秋のお風　秋風のそ
おくつる　おくつる
義のこそ　柿をを
柿てを　入江の岸
おくろん　義の下葉

かしく田面　　秋風の好ふ　　そよ〳〵
衣もそく　　秋そこの風　　いに移そゆ　　雲のたゝ〳〵
君うし　　何の九や　　人のおとさく　　つゝれ吹そ
ちひくる袋　　咲そをる　　寄りくる
をしのひま　　すゝれうこ　　秋風　　秋風そゝみ

百三　うきそこの世宝ゝ　　秋風そ吹そ　　秋風の
〃　秋風のそこゝ　　秋風そさめのそゆ　　赤人　　須人歌
〃十　萩のそ咲そる　　みくまのくゝ　　大伴坂上郎女　　須人歌
〃十一　そ風のそ咲そる　　みくまのくゝ　　大伴坂上郎女　　須人歌
古　ひく雲そ夜のすゝを　　吹こゝ　　秋風のそ吹そ
〃　秋風のそこゝ吹めそ　　秋風そ吹そ　　秋風のそ吹そ
〃　住のえの萩を秋風　　吹そ　　秋風そ吹そ　　みつ

古　あ生まめ雲のふゝ風のおそ　　秋とゆそ　　秋風
〃　秋風の寒そゝゝ　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ
〃　朝風のそゝふゝ　　秋風そ吹そ　　志賀
〃　松のそゝ風のそゝ　　秋風そ吹そ　　須人歌
〃　松のえ風のそゝ　　秋風そ吹そ　　志賀
〃　萩の花ゝ　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ
〃　そゝの使ゝ　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ
〇暴風　　そゝの風　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ
もゝひゝ　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ
秋人のおそを　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ
世そたや　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ
秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ　　秋風そ吹そ

秋風のふくなるかたに
人やつるらむ
秋の夕風
相のきそめる
萩も乱れて
ゆふべのそら
夕雲のそれぬ

ほととぎす
ほととぎすなくなるかたを
ながめつる
夕されいかやうにけみよるらあ
なれくおそきやうみの里の杜の夕ぐれ

うらやまし
世やうきも
風も名のみも
ながめても
秋をへて
かなめども

秋夕

いとひても杜にそ住なく此世こそ
〃 村雨て思ひてことの数よ秋を
〃 はかなくさいふことよりも秋うはし
〃 おもの雲もまくひぬ杜のもとよ
〃 くれをまちもたのそれ秋のくれ
〃 あの一年はてそれとはなき
村雨 杜くれ八物をも思ふ山の
○秋夜 あくれ
なくれをもうらみ又
八千秋のもとれうさやそれ
しきをもよあう又
なし風情ある

ゆくすゑも　とり火
ひろめる　いるさく
くゝ森の秋　まとおる
ほろ〳〵うめる　おきのおもて
森もる庵　枕をき荒
秋のまれ風

古　踏めらす床に落ちほろ〳〵もる秋くるひとりかり　後人
〃　秋萩の下葉もすこし色づきぬやひとりぬる人のこゝろそ　定家
〃　いつとても物思ふ秋の夜ぞ物なかりける
〃　かく年をとゝろ萩をいつまでか露の玉ゝる　後人
後　秋の夜の心をつゝてにもくとゝ琴のねそ　後人
花落てまれに秋風のふくとゝひとりある夜ぞ　称深

〃　あかなくぬわうをとゝ秋の夜をかく秋あるをおきるぬ　太古
六　いたとてもうゑぬ袖の秋の夜ハ露置て　後人
露著のゝ秋もとゝ秋の夜ハ月　後人

○秋無　秋のあそひ

なくさめ月ゝ山のふもとの文冊くのちく馬をる山のものをきこん　唐
のねをゆるとすくてゆくそ秋の無あるよ
万十　白雲をとゝハゑぬへくいさよふも秋の秋まん　後人
〃　秋毎に今ゝそゆあかれ行ふの里の男女かそれへ　東指
古　吹風のとのよ月よゝえ行るハ秋のあれハ之ちかれ　まく人
落岡陰ハ木〳〵の梢〳〵おそ〳〵荒　中納
る　はまくよんとそ風るふの山のそ〳〵　称深
〃　秋の田よあをまなる山辺をはるかにもおろふかりのこゑ

○秋望　○秋眺望

いつれもおなしよし野山ことにても秋のくれをきくこころ

きくくれはいつことにても秋のそらもとまらぬ　宗通

まきの一村　山かつの

おちつたの　まきのと

秋の山を　みわたせは

ふもとのたに　秋のくも

秋のそら　ふもとの

秋のあさ霧　川霧

山きわの　ゆく雁

指そめて秋の山へをうつしてやもみちを分る　説教

〃　川霧のたちこめてこそ秋の山は又ふかき　隆源

六　秋風の吹ても山もなくて海よ松もつまとや　右京



子　新古今　秋の川霧なれやたえまにあらそれ浪もせの

霧ふりをかくすそれ川霧をこめてや舟に乗る鈴鹿山　公実

〃　秋の尾ハ行ふる里ハ雨よ秋風そふく　信実

○秋雨　○秋時雨

雁の声ハ秋のふかきを告ひ又木葉のもる雨のつれなきの

時雨ハおもる也てハみぬの梅とうくひすの

又ハあらそふをよせて秋とそきかまし

秋のもる雨　そよ篠をつく　山へをつく

ふりかゝる　秋森をもる　秋森をもる

雨さそふ　風さそふ

雨そふるまき　風の行てそ

かさそ　ふるとよめる　萩のまとをく　まれをさそ　牙
るのうきく　秋の白　荒のひそく
百八秋の白にぬれつをれハやゝけとつきもうゝ　大伴村上
〃十秋萩をもろ人ちるめのつゆ　ハ猶もさめそうゝ秋を多き　まこと
六　ゑのやしろの雨ハ猶ふりしきり田のいろつくみえそ　〃
百十　雁をまつ村雨ふきしきれ秋ハきぬ　〃
〃　秋田のかりほの庵の苫をあらミ　〃
ほ　かゝみもやそのかきつはたかきつら　〃
指　名をきけハ秋ハ時雨にそめられ秋のもみち　〃
勢物　此さと八時雨にそめられ秋のもみちのにしきもの　めぬ
五　秋のもれ聞をくるよもすからをれてくるゝ　ほ
　　秋野　　ゆ



萩屋をけふの野もの　ふるとよめる　萩のまとをく　まれをさそ　牙
くあるハそなもやくうくうくれ　ハ虫のひまをく　雨を
古　秋のもれ雨をハ雨とおもひけるかな　ゆ
〃　鴈の声ふきたれて吟ふる雨　右衛門
後　秋の夜ふるまゝにおもひおこせつる　つゆき
〃　いつれをもつゆきてをしむ秋の夜ハ　ふく
六　秋のよにおもひ雨にそなぶのそうらん　〃
ゆふくれハ雨ふりしきり秋の声ハ　伊勢
〃　秋のをゝゆくかとよりつゝ夜ふかく　つる
　　駒迎　　雨引　　ふく

八月十五日廿五日法園の牧より貢の駒を引来るをた
をかる勅使をそ迎ふるとてよめる　歌

を南風のおくりこしきそれを院まであなたへもてゆくそ
きゝをこしきの約とうみけの約むふ
ひく約　引うく　ゐいつる
こしきけの約　屋やうちの約　杉うち有　ならねうく
大酒うみゆる　東海　自よもちひ
袖をふて　木ずゑやを　本のすゑよ　引もこしぬ
約引のわる　ゑ人　ゑゑんうる約
甲斐の忠約　横坂の牧甲斐　五月の約作法　大井の牧〻
笠系の牧〻　立毛の牧武蔵　石川の牧〻　小野の牧〻
利苅(トカリ)牧上野　ゑゑ東ゑの牧おちうみゆるそゑゑこしき　右原
原　杜若のくちなしの約とうみけ時ふまうみゆるそゑゑこしき　右原
猶　逆坂の奥のほそ路よ新みえていふ春ひくらんをうのうま　みそ



〃　なら坂の関の岩ゑゑおりふらもるきうみけ　ゑまを
、立井のわたもうけやお坂のせうみけ　ゑ物
六、お坂のうらん約を杜若のくちなし　まく
〃　都まそかうけそうらふ小笠系みつけ牧の約うやうん　みそ
原　逆坂の奥のおもひくほそ路をうらみゆるそ春の約　馬追
笠系の約引はお坂の本のすゑ　重葉
〇月　杜の月
有ものこりの時八四季よりて自おもふ新月
部よ今まう杜の秋をむすひてよめるを杜の約よ入てうく
それを月八春う杜よめうれいまふ八月といへ杜のうれと
それうう。月前をゑゑ八眼おまふ月の
前のまをむへ。

身にそふる　影ぞうれしき

名所　廣海邊の春　伏見里　明石浦　梅ノ須ヶ崎　摩耶山　生田杜　志賀浦　鏡山　狭衣山　武藏野　初瀬山　芳野山　さらしなの里

万七　久方の天の原より八重雲を　凡河内躬恒

〃　ゆきかふる人もものを　屋よ大伴旅人

〃　あしひきの山さくら花　猿丸大夫

〃　天飛ぶや雁の使ひ　坂上是則

〃　つくせこそかさしの玉よ　紀貫之

〃　四月朔日ごろほととぎす　大伴旅人

古今　白雲にはねうちかはし　凡河内躬恒

〃　久方の雨の降る日を　紀貫之

後撰　秋の来ぬ有の実ごとに　伊勢

〃　もしこのよをうしと　読人しらず

六　つゆをだに　紀友則

結人の新古みさして　村の長

三日月　新月

三月八日よりはじめて　朱雀院

新月八十五夜の月を　源順

こうたてつるゆふ月の　読人しらず

此歌ども夕月をよめる歌なり

光そふ水のめぐり　流れてもる　西行法師

西よ新すむ　入るところき　夕されのそら　よしのま

かつくみみ　まゆ　三ヶ月のかれて

百六 月ちかくてたゝ三ヶ月のまゆみかほけなくてしゐゝよはへるも　招上帝女

ゞ ふかけて三ヶ月これハ一目見し人の方よひきかえりゆるも　宗抬

比ふれとまや三ヶ月を女の眉もたしくていへるなるらん

古 よひのまれ出て入やるみか月のかれて相見ぬも在るあるれ　徒人宗

六 三ヶ月のかれて八人をかすもよに二夜ハいつるも在るゞ

夕月　ゆふ月夜　上絃月　弓張月

、つきよりも暮月夜そて月のそしめく見えすとも十日ころ

まての月をいふなり

弓張月これも十日頃のほとまても半月に見ゆるをいふ

夕月の影　いる月　ふかき月　これやま

ゆふへの月　いるさ　西へ入もの　くれて待る



おほつかなき　待ずそ入　ほのめかしそむ

百七 あふれのをはのふるへわかひと相もてみへるまじかき夕月夜　もろくもたるに

ゞ三 天けたかふきれハ志まれる掛くかけて板道ハよえん　写く大輔

六 夕りもおほつかなく人をやるほと何をもて晴ぬからも在ぬ　徒人宗

金 風ふけハ枝やほるゝぬ木間よりほのかえく秋の夕月夜　太隆

ゞ 山のそれにあすて入ぬる夕月夜いつあかつきにまたるらん　公資

千 秋の夜ハたんまに待るにをしめてほのかに見ゆる夕月夜　家

停午月（テイゴノ）　なかそらの月

待くし月の真盛にして月をそまたえにはるをいふ

新月なる　まて出たる　ほしもつえぬ　のあらかき

よもすから　待よ中　時るくまかき　月のまゆ

出入山の中すら　月あかりて

万　はつ雪と春の夕ぬるゝ空の雨よかすく〳〵杜の春それ　権大僧都
雑部　なごやかくうらのどかに時も　教隆
〃　入日さすまきの戸口に立ちよりて待月　待をきは
まちつるさとの　行くゑひさし
くもかくれ　まつ出やすぬ
山のあなた　出ぬま
待わたる　まつれて生き　実方朝臣
万六　待えてこゝろ有明ばかりかなしきものはなし　春宮大夫
〃　雨こめて笠の山を高しかも　曳言
かゝる時も出くる月のおそく恨ん　松殿基房



雑部　なごやかくうらのどかに時も　小弁
〃　やとるかとうぬれ山の緑の月結ぶ　かげ
金　此世こゝ山のこゝ緑の春をのこす　西季
〃　こゝの月結ぶこのこゝ緑いかゞ　大納言
初秋の月待ていひまるんく変らをうゆふ　春宮
子　秋の月こゝのやまあれて　けさの
雑　月結ぼこのこゝ緑のこゝろ　小かぜ
〃　山陰よその投きる音のこゝ　乃園
雑部　月影をんのこゝよ待わこゝ　お投
十五夜　八月十五夜　ゆうべ
かゝる月こゝ海月こゝ又十六日雨こゝ月東よあり
て持月とこゝこゝこゝ月をこゝてめこゝ年ハ

寛元天皇の宣旨ありて
秋のもれる　もれ聞て
こよひ名こそ　二村雨
名を却て　秋のそら
てらひこそろる　めつらしく
世をみそる名　いそをそれつゝ
及　月就ハ却て光の秋のおと
〃　袖よりつゝ月の光ハ秋ことに
〃　いつとても月こそぬれ秋ハきぬ
招　名の雲よ照月なみをかそふれハ
〃　秋も行そらそをかなん秋の月
六　難波なる塩みち月ハ山のそら

〃　久しの天津そら新月ハよく呼招をはよの招
落　秋も行さを惜てそひ月も
金　佐やけさハ名ひきかく月
不知夜月　いさよひの
いさよひとりと夜籠(イサヨフ)こそ
ふりく俗よりくよそひ
ふよハあらねとほ我物思
ゆく雲をそれまてほよ十六夜月
いさよふ月　去りていさよふ
きよりあらそ光　きよりあらそのおくの
万三　久そ待こそ名をこひさん山招
千　け月れも行世のうそをそうる北

立待月　たちまち

十七夜の月をいふ　挂明初ゟ十五夜の月

をまち〳〵みりおそく此時分ゟ月

出る迄久〳〵ねばならぬ人を

待ごとく　立まち

待ごとく　月まち

ごとく　山もゝひてごとく

井ぐちまち　人をまちてまちごとくあり

〃　夫婦のさやの中山まちごとくあり　仲正

〃　しらつゆもまだひぬ間よ今宵も月をまつ　新古

居待月　ゐまち

十六夜をいふ　打まちごとく

ねまちて待　月まちがほ

臥待月　ふしまち

挂明初ゟ十九夜迄ハ山の端ゟ出る月

のゝ出ゟ〳〵まち〳〵ふしながら

〳〵かの待宵ゟ廿日夜のごとく　十九夜ハやゝふけ

行てゟ出る故ふしながらまつ

ごとく　ふしまち

ほとゝぎす　なみだ

六　矢をのごひまち結の月まち

〃　矢結とたちまち居まち臥まち



〃　山ごもりの雨のごとくなみだ

〃　なぐれめぐりいる結の月をまつ　新古

〃　花すゝきの衣を着よやれよほと

臥待月　ふしまち

挂明初ゟ十九夜迄山の端ゟ出る月　新古

のゝ出ゟ〳〵まち〳〵臥ながら

〳〵かの待宵ゟ廿日夜のごとく　十九夜ハやゝふけ

行てゟ出る故ふしながらまつ

ごとく　ふしまち

ほとゝぎす　なみだ

六　矢をのごひまち結の月まち

〃　矢結とたちまち居まち臥まち

廿日月　　おそき月

おそき僧（ハツカ）とも須よそへあやまつ

おそくみる　山のそつる

丹る　よしのやれ名しり雲をおもふ

〃　松葉やおそき山のり新

在明月　あるかの月

曉　月　ほのぼのと月

殘　月　おそき月

大そかくいへそれとつまよまよ夜

よもすがらをうけてあそ

新しも　山の端ちかく光を隔る　井そよ明る

月のかく　曉のかる　新のかる　おそくかる



明くれる　そらよりほのぐ

金　山寺の門田の稻のおそく明る　引海

千　里曳の山の端ちかく往てやみるあかの月　詩意

〃　ほのぐ入人名残をいとゞ思ふ

〃　いつもかくる所の月の明方八拍やうれしきほうの茶　魚覚

詩云入中夜起而望之　ほのぐとして明る

深夜月　深更月　保季

ふけ行夜の月

みゆく空　ふけ行新

更ゆく月　山寺の鐘

松風ふく　長き夜あかす

ねくらの　自笑

百九　金松の山を高みや松ふけ行

〃　七ふ夜のふさくほくくと夜ゆく月　詩意

゛天河風雲をさくりかへ入雁をさすまゝよ夜の月ハ恋しひ斗そ　高政

゛中々に声しれぬ雁や秋の月なへてひの数ハ一様とはいは　宗因

〇雁　　きつね　　秋の雁

雁ハ異の様ちるに鳴ク姫のえきハに来るといへ共秋寒き時来

られハ夜を借といふなり　コ、田を刈ふなり　何ゟハ文字舟

等アたまにたもえんくてよふ友を呼雁也のふくもよあり

初かりがね　秋のかりがね　夜ふかきかりがね　門田のかりがね

とびくる雁　ともなふ雁　雲ゐ行雁

来る雁　おつる雁々　雁の渡る　帰るかりがね

天とぶ雁　雁のまつき　雁のつらひ　雁の名のこさ

雁の涙八ぎ　やどをとるかも　数にむつかし　常陸見て渡る

雲路をわたる　田面におりる　ききおもはせて　月に渡る



月に棹さす　雲のそら　芦べにまよふ　いつてをさす

声高におち　窓のうへ行　窓みをそろへ　雁の腹ゑ

飛鳥こえ行　雲のいつく　ものうさに　なよふ

こし路　山の端　門田の面　たもとにさく

嵐をさそふ　波にそうて　いまや捨る　やうとかへて

ねさめに妙　小夜ふけ　いくつ　つもる行をて

羽風　かへる数　稲まで落る　衣もその衣

きゝはる笛　おのゝ羽風　杉のこえによ　月に帰れて

雲の行に　雲路にむきて　前おもふ　おりひ羽

雲の海のあく　秋風を　月の下に　数の大文字

そらもわかる　何のそらく　けせいのかて　かなしくる

月にうき　都を旅と　雲に立かへ　春も帆にあけ

ねくらさためは 月よりくれて やまの松かく
名所 伏見の田面の庵 鳥羽田、 广沢、 大井川、
立田山 大和 田簑ノ嶋 摂津 住の江、 明石の浦 播磨 伊勢海
白川関 陸奥 宇津山 駿河 清見潟、 門司ノ関 豊前
万八 久かたの雨間もおかす雲かくれなきそ行なるわさ田かりかね 家持
〃九 秋むらの入江によとむえいめ人の待らんのかみしかりかねなるは 読人しらす
〃十 芦辺なる荻の葉さやき秋風の吹来るなへに雁鳴わたる 〃
〃 秋風に山飛越る雁かねのこゑ遠さかる雲かくるらし 〃
〃 ぬはたまの夜渡る雁はおほゝしく幾夜を経てかおのか名をのる 〃
古 いとはやも鳴ぬる雁か白露の色とる木々ももみちあへなくに 〃
〃 春霞かすみていにし雁かねハ今そ鳴なる秋霧のうへに 〃
〃 秋風に声をほにあけて来る舟ハ天の戸渡る雁にそありける 菅根



〃 待人にあらぬ物から初雁の今朝鳴声のめつらしきかな 元方
後 秋風にさそはれ渡る雁かねハ物思ふ人のやとをよかなん 読人しらす
〃 行かへりこゝもかしこも旅なれや来る秋ことにかりかりとなく 〃
拾 声たてゝ秋くるからに初雁のきく宿ことに見へつらし 〃
六 もゝしきに引つれてこそ雁かねハ聖人にかへる雲路 〃
〃 いとまなや鳴あかす雁の古衣ありし人妹もあはれかなしく 読人
〃 きゝはてゝとふ人もなき初雁の中ゆる声ハはるかなり 〃

○鴫 しき

那波田にもしけるあしの中にも鴫のたつとは河のほとりにて鴫をたつといふ
百羽かきハ きくかくきら、ちくしくあまりにもちのよきにとりの
さはりなきにまれと あきしらぬ者もそへてかみつ
あかつき 小夜略 とひつくる 数かく略

いくもの　　いつ田のそき　　鳴の初雪
鳴のみち　　咲こゝろ　　初雪もこゝ
汉人の床　　ふとん鳴よ家
さゝしき　　初ふれゝき　　寒くる
名所　伏見　藤森　深草里、長岳、猪名野等
方一　旅ゆく物こゝろきの雪も降そひてふれ下　蘇
〃九　雪ふみて物ふれきよはゝこゝろ　後人歌
枯　志れゝる狩名ふ家とひこゝる時の初雪を打のろ狐
六　嵯のきれものかき夏ふれかこゝろ
〃　ほそゝふ初雪ふそこゝきれこゝろ
〃　咲ま〻かく鳴のおもふいく初雪を志ひこゝ降雪
○鶉　うこゝ

冊〻あそこゝる庭なとにゝよふ初あそれこゝふのかこゝろ
うこゝ鳴　こゝろも
そふくれ　その庭
冊〻のこゝ　こゝきせ風
おのふこゝと　名こゝも風
ふまきれ松　をふこれ
秋をこゝろ　ふすこゝろ
雪のまゝ紀　名所深草里　伏見　大原
名所深草里　伏見　大原や
志ほの入江　栗津野

万八　をしかふす小里の秋萩を見る人もちるあひみつるかな　よみ人

古　咲と移ろふと思ぞとしハへんかなされや八尖ハてけらむ　〃

後拾　秋風に下葉やさむくなりぬらん小萩か原にうつらなくなり　通宗

〃　人なくてあれたる宿の浅茅生にうつらなくなり秋の夕暮　時綱

千　夕されハ野への秋風身にしみてうつらなくなり深草の里　俊成

新古　あたにちる露の枕にふしわひてうつらなくなりとこの山かせ　俊成女

〃　秋をへてあはれも露もふか草の里とふものハうつらなりけり　慈円

○霧　きり

きりハ秋と記るすといへり　和語の俳諧にいちはやくされハ以て人
ハ秋にかきれるにハあらねとほかく秋の物としてかなをたてへてく
それともはるくゝにみゆるほしよりかすみをわくへし
とよみるへき也



朝霧　夕霧　夜霧　うす霧
はさしめり　野さきり　秋霧　河きり
霧の海　霧のまかき　霧のまよひ　霧くもる
きりの中　むら霧　霧深き　霧こむる
霧のひま　霧のまかひ　霧ふる山　霧の下た
霧の上行　霧にふき入　霧の晴れま　霧よりも奥
霧のとだえ　霧にくもり行る　霧ぬれて行く　霧の行かへる
霧まよふ雲　霧のまきれる　うきたつ霧　霧かさなる
秋をさむみ　朝わたり　霧うしなふく　霧にぬれて
霧吹おろし　霧にまかせる　かへる秋霧　風の絶え間
月よ晴れ　明ぬ夜のこと　波音となる　霧なめく
嵐よ吹く　鳥てなふ　宇治川　かすみかえし

又ゑりをそめまさりたるをゑりかへなどいふ
まさはせてまうけられてあるべし

秋のきぬ　衣のきぬ
きぬさのぬと　うちあらし
きそうつけ　着ようう
うちきる　ものうはおり
たもとをそうつ　おりそうつ
うちすそむ　衣をの衣
かり衣　白妙の衣
雪分衣　花すり衣
こうろも　捻巻き衣
ふる衣　おつるきぬ

いそくきぬ　はたものきぬ
よそひうつ　うつし
月うつし　妹うつし
ぬそうつ　うちもゆきぬ
うちめおり　もみまきうつ
麻のころも　麻のきぬ
袖つけ衣　白妙の衣
波うち衣　河内おり衣
雪分衣　花すり衣
こうろの衣　捻巻き衣
ふる衣　おつるきぬ





ぬくとし　ぬちうす
ぬくきぬ　衣をよそふ
紙うすき　ねまの衣
紙うすや　ふすまも
ほつつきうみて　身をうみて
うちうす紙を　うすき衣
お受衣　雪衣
秋風そで　風のそうむ
衣のうそめき　小袖
名所　桂の里　秋篠の里
志賀の都　秋下浦舟

〃 風さむみわかから衣うつ時ぞ萩の下葉も色まさりける
〃 から衣うつ声きけハ月清ミまだねぬ人をそらにしるかな　貫之
〃 さ枕夕風さむく吹ぬらし衣うつ声やたかくなるらん
〃 夜をさむみ吹風さむみ衣うつ声かすかなるぬ秋ぞちかき　〃
後拾 小夜ふけて衣しでうつ声きけハいそがぬ人もねられざりけり　伊勢大輔
〃 うつ人のあやしくねやのをさむきに衣うつ声ハ聞ゆなり　西行
〃 から衣たれにかすらん秋の夜にあかぬ物から月にうつらん　俊頼
千え 松風の音さへ秋ハさびしきに衣うつなり玉川の里　とし頼
〃 小夜ふけて砧の音ぞたゆむなる月をみつゝや衣うつらん　覚性親王
〃 恋つゝや妹かうつらん衣きぬたの音のそらになるまで　匡房
新古 みよしのゝ山の秋風さよふけてふるさとさむく衣うつなり　雅経

○九月九日　ちくめう
○重陽宴



此節ハ大かた菊の盛なるを祝ひてよめり又菊をも用
しれとうたふハ重九 重陽のこゝろをかくいふなり
。重陽宴ハ宮中にて古き節会にて菊にいはふことやあるらしめく
る菊の盃ちよをみそぎぬ世をさへ菊にうけていはふらんとぞ
へてなどのほかあそひなり　これハ此の菊までかうむへし
拾 わがやどの菊の白露けふごとにいく世つもりて淵となるらん　元輔
〃 長月の九日ごとにつむ菊の花もかひなく老にけるかな　躬恒
六 百年をくらしもちかし仙人ハたちよりやハみる菊の上の露　みつね
〃 ぬれてほす菊の下水さとよりも秋をへにける夜の露はまれ　はるかぜ
〃 かざしつゝ今日ハひとの手にへつなるらん菊の花にや折らん　伊勢
○菊花　きく
きくてふ菊の山路の菊の菊のかほる　今日ぞちよとゝへ

[illegible]八十[illegible]は南陽郡縣ニ有ニ菊潭ニ飲ニ其水ニ者皆壽と[illegible]
[illegible]又仙人の[illegible]
[illegible]家ニハ[illegible]
杖きく　[illegible]
八[illegible]　家のこと[illegible]
まろきみち　家の名水
きくの事　家の我
家[illegible]　家の谷
家のふもと　家の酒
家のこの[illegible]　初きく
かさしの[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]

[illegible]　家の[illegible]
九[illegible]　家ひさき
[illegible]　仙人の
[illegible]　おもて
[illegible]　家[illegible]
家の事　[illegible]
延喜[illegible]十[illegible]
[illegible]　大淵[illegible]
[illegible]　吹飯浜
古　杜風の[illegible]
〃　一[illegible]
〃　[illegible]

〃 うるてうゑ林ちさこんそれこそちつみ折さへ林あや　ゑ事中
〃 秋の事句さてうゑ林かさ　後くるま
〃 おのれこ折て作人家のひおをぬ秋のひさしかるへき　古列
〃 久うふけやそのとそんうゑ林やゑ秋る　都列
〃 んあくにをこ林や折んそ林あのおさ千と林きる句事のふ　こつる
ほ 事のそ花を見てとふ吟うゑ林八久へきこころ林やこんん　後くる
〃 万代のおふもかをぬ句事をとうふ安くもかさしつ氏　仔衛
〃 多う折へ林も見てとふ吟うゑ林の事八句へとそそる　林久あ
〃 おかりてとそひのそよ句林こそ秋うゑ林む　古列
六 おくるお後まとふきれ事おふいつ仔かのそこよふる　ゑこ
〃 事のふるふるやとの仔衛をこ林て句事をとうぬ　後くる

○殘菓



九らのそちる吟林句事をとうふ文うゑ氏ろひおるんそよみ
又秋よおふまてみ仔ふくをもよこそ秋みそもよめる衛ちあ
よせのこそうふよ事ちもふきんこまれみる句ふことよみ
家ちもうふちもあう
古 林一附安結うれ秋よ仔ちんそ氏ろ仔ふ　ゑ墨
〃 そうふ秋の事を八一ともみるふ句ゑ安よ秋うれ　後くる
牧 ちふ世よう事外ぬ事ふあうふこよ
六 後とのふこそこまを結ふ句事外れ　古列
乃衛安やうちほふる事ふ秋ちこれん恋けん　氏古
○紅葉　そそちちや
かみちふかみへてうる事うて家もとお後ゑすうふ安
をもみおてほるふくる寺をそそいへまくまを

〃 九月のらんをみてよめる　　貫之

古今 白露も色こそ分かねしぐれのやもみぢをみるたびにあきはかなしき

〃 秋風のふくにうつろふ白露のたまもかたしく袖もしらつゆ

〃 白露のおくにしうつろふ秋の野をたれかはるばるきてしのぶる

〃 秋のあらしにあへずちりぬる山のもみぢはなきぞかなしき

〃 おのづからしぐるるよりもおくやまのそでよりほかにもみぢしぬらん

〃 天川ふもとにわたるさほ山のあまのいさりもいそがざりけり

〃 かく許りみつつもあかぬ秋の色を何にうつしてとどめおくらん

〃 かみなびやしぐらむものとおもへばやこぬ人まつ山もこがるる

〃 かく斗りみつつをあかぬ秋の色を何にうつしてとどめおくらん

〃 おそくともくるを待つ山の紅葉はえだをはなれぬ物にぞありける

拾 枝ちらでうへてをとへとうゑおかん紅葉



〃 秋ごとにもみぢするやまのあるものをいつのまにかはうつろひぬらん

〃 時ならぬ山にはあれどもみぢせばいつのあきとかみてやこえん

〃 久方の月をとめけるあきのよはいつのまにかはもみぢそめけん

〃 ちるもみぢをけふかぎりとはおもへどもあすもあすもとかきつくれば

六 雲ふきまよはすかぜのやまのあらしにぞ秋のこずゑはまづしられける

〃 散ちらすかぜのこころはあらしにてしぐるるやまぞまづもみぢする

〃 時雨ふるたびにやまべをこえくれば袖よりほかにもみぢしにけり

〃 秋の月いでてもみぢをてらせばやまかぜふくとみえずぞちりける

〃 秋風にもみぢをぬさとたむけやるたつたの神ぞしぐれ降らすな

雑冠 かへて

ちよの秋のまよりいでしもみぢばはつきもせぬ秋のあやなり

○暮秋　これの秋　○殘秋

○冬ごもり　冬の籠居　冬ごもる　冬籠る

○初冬　十月初より四方の行事のある　冬のはじめ　冬の初め　初冬の

五十鈴川ニ馬ヲ競フ
〃 九郎判官時目ノ考ヲ我セラルヽヤ
古今
〃 立田川詠歌ノ後ニ
〃 吹ノ下ニ
〃 逢ヲ待ツ
〃 立ヨリ
〃 立ヨリ
〃 神無月カミヲ
〃 神無月時雨
〃 立ヨリ

六 かる山のふもとの紅葉も散はけりちりかゝるのとこしくもなし 兼之

〃 落葉ふかき霜の山かやみ月影の宿のつゆ見えもかな

〃 山ちかき所ちかくれハ紅葉も落しくそれいる桂

〃 風のふくふくのかひつひは院の露そおしもをれ 弘恒

良経 神無月わたる時雨ハ山里のはしのみ八木葉ちりけり 雅国

〃 落葉もる秋の月みえてさしもは吹もなくもたる 公任

○殘菊 のこんのきく 冬の菊

秋の終るハへるとく九月九日より後の菊をさくもいひ又いふ

菊をさいハひ又ちるも在れ

咲残る 降りつゝ 霜をへて 霜かれ残る

冬も枯ぬ 霜もかれゆく うつろふ うつろひたる

世をへて盛けれ 冬ざれの菊 秋のこる残る



秋しりは 霜かれの菊 霜にひたる

古 秋をおきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされハ 貞文

六 神無月の菊の色こそ移りけれはなの色にハなをとめしかな 後京極

後拾 紅葉ちらしきの色をうつろひたる菊にそふる 公信

詞 菊枯のみやこくみやのさかのおきて残るは菊の色 好忠

〃 霜のかをとめてはいろの移ろふそちけくまでも 経光

〃 おとくうき咲へきのうへのうつろふ菊とめかくしとせあ 家隆

千 けさみれハさかりの菊をうつろうく霜さひゆく白菊の花 略

○霜 しも

霜ハ秋のまつかり初るハ秋のしも初霜なとよめる事 秋の部

も出せり〳〵冬の西にしもあれハ文も出れ

歌索　　夕索
索くかな　索ひとし　索のそ　索ちる　索ちる
索床の索　いもあひの索　索ちる　索ちる
索さやく　索ちる　索ちる　索ちる
枕の索　夕索ちる　索垂きま　索ちる
索ちる　索ちる　索ちる　索ちる
おくしも　索ちる　索白ー　索ちる
歌索ちる　索ちつく索　索ちる　索ちる
索ね　松の索ちおく　索ちる　索ちる
索ちる　外の索ちる　索ちる　索ちる
雲ちる　風さゆる　小笹原　索ちる
人めも　索の生ま　浅茅生　索ちる
枯野　索ようひ　袖のひさゆる　索ちる


万十二ちかまそに万ちのやーよ　歌人索

〃　ほろ索やの鶏のおちひそ　〃

〃　索れちる索ちれそのいつくかまてる索ん　〃

〃　猿人のやうそん索ちるまを　〃

古　索ちの索のやうた蛙ちる索ちる　〃

〃　索ことねやへもいろいろ小笹原つもちゆひよ索ハおハ　〃

〃　笹の索ちおく索の索ちさちみハつくちもちやみつる

後　索ちる索ちる索ちのこひのおよハみちん　後人索

六　文ー索の列会の索ようそいかちおち索ちあちん　伊勢

後拾　落つる笹の索ちを松のおよハひてそうちる鶏索　人索

○枯野　冬ー野を

る雨ちくちそ索のそれのそ雨のさしさよをちる

詞　楸おふる河への芦の冬されは雪もれの床そ取はなる　好忠

千　かるかやの杖をや思ふ霜枯の萩のうら葉を照す月影　家京

新古　霜さゆる山田のくろのむら薄かる人なしにのこる比かな　道因

続後　枯残る冬野のをさの風すさむ夕霜のふる袖をこそみる　実雅

玉　虫の音のかれ行まゝに庭の面の萩の枯葉の音そ淋しき　大輔

続古　霜をくる小野の小篠の枯しもあはれ也　相模

○寒蘆

海川江は池ならぬ芦のかれて寒くも清むれ　うれあし　冬の江　みなれてあは

志をれ葉　志をれ芦　下をれ　下をるれ

みるれあし　霜かれ　浦風に折れて　河の辺

折ふれ　あしの種　むらあし　乙れ芦

芦の古葉　淋しき芦　枯る江　風さやく



小舟さしゝぬ　冬さくよるとり　霜にもされて

芦間の水も　鴨のうきね添ふつか　あし河

入江よさき　つらゝ　冬さて

名所　難波江　みつは　之の江　玉江　松浦の浦　紀伊　宇治川岸

新古　津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたる也　西行

続古　みなと江に難波の冬の霜枯にしらぬ芦のむら立　朱直

続古　夕あらし山のかけちる川の隈なる河の霜おきさし冬　太上天皇

風　みなと江の水にうつる芦の葉に夕霜さやき風そ吹　讃岐

玉　芦の葉ハ霜枯ハてゝ小舟さし入江さひしきなみの入れ　言氏

続千　難波江や朝おく霜に枯ハてゝ残るとしもなき芦原　為家

○寒樹

松をとりしめ冬もまた枯れぬるまゝ木の葉ちる霜しくしくれ霜ける

うの風ふきみだれてあら
玉のへの松　松ひとり
風さはる　　ふきそそ
あらまくもれぬ　みまくもれぬ
梢さびしく　　夕こそ秋の
六　世中よ　　き物にこそよもの
雲　ふき　　ても心もわらはぬ本牧の
物　みの　　のおちそそぐ秋の
玉　敷つゝをぬこしも洩ふ原さ
○椎柴　　志ひしを
椎柴ふるに学ぶ切ろれおも
志ひのを柴　椎柴の枝
みねの松系　雲垂れて
敷つゝせぬ　　あらまくもれく
梢さびしく　　夕こそ秋の
六世中よ　　き物にこそよもの
雲　ふき　　ても心もわらはぬ本牧の
物　みの　　のおちそそぐ秋の
玉　敷つゝをぬこしも洩ふ原さ
○椎柴　　志ひしを
椎柴ふるに学ぶ切ろれおも
志ひのを柴　椎柴の枝

ときハのそ　　ありとれおく　雲よ打ふそ
み〻椎らぬ　　業末よ打ふそ　岩の椎業
み〻そ〻ら　　み〻そ〻ら
椎の〻ふ　　かみ〻ら
椎ふる雲ふも　　いつれ〻ふ〻ら椎業ふ人の
〃　いつれ〻ふ〻ら椎業ふ人の
〃　時雨つれ山風よ椎ハのそ〻ら
〃　み〻そ〻ら
〃　位山〻の椎業ふ
○冬〻風　　そ〻のそ
あら〻ハふそをにそ風そ
み〻そ〻ら

〃 かゝる浪のこゝろをけさみれはとふくくもぬれくおとなし　急盛
〃 飛つちりその初風のすさまれハ浪の音を聞くやうさかる　友只
〃 冬の夜ハ浪の音さへ冴へき八月のひかりかみつくなりけり　元輔
○冬月　ふゆの月
志ぐれにはきれくもの又ハ千原く雲まに冴も音そかれはえと
ほり雪のつもれる山を出る月こと清くきらぬさすかれとこそ
新さゆる　はゆる夜　月ぞ冴れる　さえてとぞ
霜のうへに　雲はれて　冴しける　冴てなる
雪おくつゆ　冬の枕　寒すしむ　ふきたつ風
霜さらぬて　冴る夜の月　霜枯の月　あらしさゆる
志ぐれてくもる　あきふけゆくる　霜は吹やけき　雪ふくうれさ
やとれける　霜枯れ枕　篠ほこら宿　木あらしゆくて



すけるはぬる　はくもぬる　枕の水　夜半寒く
白雪に降る時は　雉の水に　新すさまし　あらしの風
おきさるよ　寂しき夜　氷しみゆる
良　めぐらむの夜はすぎれる白雪は照月かけのつもる折から　法人
格　冬の池の上は水よりもちるかくいそ月の光はつる哉　〃
〃　天の川原に住人もみやつまん氷とみゆる冬の夜の月　重之
六　冬しめる雪の下に照る月を見そしぬれて澄める法の夜ちとよ　つらゆき
後拾　山の端ハ冬の空のもれりけつかん人のこゝろそはる冬の夜の月　太武之佐
金　冬さえみえて氷れる月影ハ雨よりもちるそとも氷りにけれ　顕仲
〃　いつも山雲かつれる高根よりはらくさて出る夜もその月冴れ　隆光
詞　枯ハ松の木のしたたり白くうつろき月ハ冬枯ぬる人か冷れ　基俊
千　月のすむ空ハ白やかてみちぬけるかな小ハ水へたて、　雅国

〃　おもとさま　結城家の下屋敷　東京
〃　生駒学士くにのおくさまよりの書状　公家
書　みな精の妻の形容のまれのごとき好ましき　清輔
○千鳥　もとより
海辺に出でをりめずらしてみよりの感情よ
てあれども又書こひすることよりの又何ごと
ぞ　それとよめる八書籍のごとくにへだりの又ちくみれな
世ごゝろゆるよつゆて枝そ
浦もとより　海ちどり　琴ちどり
なく　夕なる　小松ちどり
友なる　友なる　夕汐なる　もれみるなる
加ちどりなる　去いゐるなる　ねさめなるなる



みるなる　すむなる　ゆくちどり　みぎはのなる
雪ふなる　汐干のなる　八ち世れく
松のうち　よひそれ　新うち
いそなる　り海なる　なまく
もれなる　友なる　あのさゝやかさ　おひてなく
もちなる　逢はうなる　川路うち　ちてなる
立のさゝめれ　立のひさおさ　立るひてなる
あさゝてる　うたゝれる　芦うつゝ
あうくうれく　ゆふさゝれ　雪風を　風
そふおもふ　ゆふおおな　なもはふ　死
清水川家　名所　清水川　かも川　名所
清水川　名所　清水門　清水　住吉

なるべし　あまの橋立　丹後
百三　うごきのあるごとくみゆるなり　天の橋立　丹後　海辺
〃六　ぬき足のあしあとのゆけるごとく水ぎわ　人磐
〃四　小おもてになるかちどうおもてなり　赤人
〃　依保川　いほがわ　大伴家持
〃　みそれ　雪　大伴家持
〃九　おくてうねそへたれば　古語のよさしその略なり　後人考
〃　ぼうこれんげしの　花　夏
指　夕されば　夕方　夏
〃　ものごとね　味　秋
〃　ゆくえ　行方　秋
〃　冬の川風　冬

六　みぶ　壬生　京
〃　波のうつほる　波のうつほるごとくなるをいふ　後人考
葦鶴　葦鶴　冬
〃　明あくるかもの川　お抔
○水鳥　水鳥　冬
鴛鴦　鴛鴦　冬
又ゝ水をくゞりもぐりて又ゝ　又ゝ　水をくゞりもぐりて又ゝ
のごとくあるをいふ
をしかも　あし鴨
くゐ　みさご
すごも　都鳥
うきね　あさりする　鳰

すゝき　　ひとむら
ねぐらの雁　下たちぬる
つゝの葉　さわく入江
池の蓮葉　おき榮ひろごる
つくねをて　畫ゐるさまを
うつくしき　鴨のつゞきの
おもしろき風　小松のつゞきの
をゝの下鳥　松の枝
鴨のむれる　をゝのつゞき
うゝの葉　みさごさわく
冲のつゞき鴨　うつくしうて松
つゞく山ぞる　鴨のむれ
夕照　波のつゞき
うつくしき芦ぞる　もゝの葉
松のしげみ　雪のゆき
鳴やつゞきの　むれ鳥ぞ



たちはなの　松のしげみ
枝のをゝ　畫ゐるさま
鴨つゞき　白うつゞきの
名所　野のねぐら
大井河春　雲深ゝ
春の池邊　ふるの深
夜　水ぐるまかゝる井のえこゑ　ゝ
六　月夜のおぼつかなきをも晴やかひちぐん　ゝ
千　水ぐるまのをゝやうにあんぐる　ゝ
ゝ　ふるの家のつゞき松かえ　紫式
松　ふるの下安うゐおりひよはあ　馬角
ぬる　松もすゝ書やおくらんうゝ　彫季
池のよしのゝ水ぐるま波やゝ　杜風

玉 あさがの水に波うつ夜のあけぼの

○鴛鴦 をしどり

万十一 妹こひいねぬ朝けの秋風に吹とつたへよ

及 おもひをみねえてきけやもず鳴

金 なゝくに夢にみえつゝかなしきを

〃 ちむろやひこ山毎の夜のさ牡鹿

〃 時雨ふるなみだをさむみ

手 をし鳥のほろの羽風

〃 妹にあはんたつきやの沖

〃 妹にのをし鳥のおよすけ

わく舟を掛ひろひてやもをし

鴨 あしがも

夏 吉野なるもゝ瀬の川のほとり

〃十一 五妹こふさゝやをにうらん男よ行鴨のほねのやうけくもか

〃 山のそま峰むらさきにうらんれと

及 そ妹のかよふ夜の芦鴨

〃 まそ鏡かけてめる鴨のそ朝

指 ゆきやおそくあの川芦もむ

〃 雪もめ神さひそのよ鴨のよそひ

六・ねそそ春ふそ吉野鴨の

鳴 なは

万十一 思ふ事あるあふ夜鳴鳥の

指 なくなりのみのをそうとそ

六 夫こ君もろれもたて沖よ行鴨

〃 猪のこみつれ振なる鴨のそ

都鳥　こゝろ
万十　われきみを思ふ振江の川のみなきにや　素材

○残雁　みその
秋ふかくきこえわたるかりがねの
秋はすぎゆく　雲のかよひ路
雲田よおつる　雪よまさる
雲田の雁　声そふけゆく
かりがねも　かの田
る　面章に浅のくはなちて志
風おく霜八里中そふる明日の朝
○細代　あしろ　何ろ
氷魚をとるあしろにくあらハ罪川の舟よあるとも
彦くしをせきくに細をひきわたしたる遠ちも知く
杭をおろそくそゝとよ氷をあつめよ細ろさそ



形ちる杭木の内〈廿そわく流を入給の氷のなみおよ
○社小水なく流来〈氷魚のくはるをもおく吾ろ取
少ろもそ意八九月ちそ十二月よりそ
あろろ　あろち
氷のあろ　何ろち細
ひをそる　氷魚まち
ちにそそ　氷魚を
そのそ取　川ろ世
氷代　いさよふ波
細代まの布　あろ木よ布を盛の
月さやそさ　つゝみ屋さにさ
さゆる川氷　社よる宿

名所 宇治川 岡上川 近江の海

百三ものゝふの八十うぢ川のあじろ木よる人まれ

旅 月前のうれしかりけり旅ね哉 行かふ人

〃 網代木をかぞへあかしぬ宇治の橋姫

六 もゝちよの秋の深きてふ名もたのもしや

〃 みやこ人のかへりこぬ八十うぢ川

〃 旅つゝもおもふ人あり八百年の秋のとまや哉

旅 あじろ木よ都恋しきせゝらぎに

金 身にしむや網代の氷魚をかぞへ見る

〃 ひをのるゝをよみ侍る 網代木や氷魚をかぞへ

○霰 あられ

打ちあられ風わたるなり那古の浦



うちあられ夜の妻よ芦ぶきの

五百つれ あられうつ

うつくしき屋根やもる妻 あられうつ

あられうつ風のうへ

ゆうつめて 板ひさし

板ぶき 芦ぶきのやま

ふきまじへ あられまばらに

まばらの日影 身にぞしみける

板やのあれ 風のうへ

おもしろき あられかな

あられよ聞く たゝみの裏を

風もせで ぬきとめぬ玉

うつや竹の　うきはし

名所　住の江の岸松原を見わたして

百千代をかけて松ふく風ぞ吹　雅楽

〃　ふた神よ力をそへてあら妹とみんあめ

はかきこゆ雲うす〳〵け白妙を

六　あら〳〵かみとくらゐ拾ひ玉ふぬくへく

ぬれとふ人しかきせ雪きのふやと

〃　杉のいほをそよめかす里のふる斗つゆ

をもらぬ夜のふるやまふく嵐の

子さゆる夜の袂の板ひのひねもす

○霙　みぞれ

さしかさ　　袖もそぬれ

たもわあへぬ　家好ちよ

住の江の岸松原を見わたして

百千代をかけて松ふく風ぞ吹　雅楽

〃　ふた神よ力をそへてあら妹とみんあめ

はかきこゆ雲うす〳〵け白妙を

六　あら〳〵かみとくらゐ拾ひ玉ふぬくへく

ぬれとふ人しかきせ雪きのふやと

〃　杉のいほをそよめかす里のふる斗つゆ

をもらぬ夜のふるやまふく嵐の

子さゆる夜の袂の板ひのひねもす

○霙　みぞれ



いのえうう雪のゆうまでふりをけ

みぞれする　ふぞれ粧きる　ふぞれする　みぞれ雪

ふりもそめぬ　なまうるもぬ　さゝひてふ　風まもる

降しなまぬ　和さゆる　降ぬき　降ぬき雨

ゆうまでふりをけ

○雪　ゆき　みゆき　あて雪

みぞれ雪　ふぞれ雪　ふぞれ雪　みぞれ雪

矢田堤にて　芳気仙郡の国司甲斐守にて任満ちて帰京の時送別の宴にて
らーの山ゐ　天の雲く山ゝ　大きうの里　春の道　松の雪　春
五二　わたらふ大宮ゐまもる大ゐのみかきみちを　天武天皇
〃　あをうなばらふりさけてみれば　菅原夫人
〃八大にのまうみのゐは雲ゐ　いくうれおうみよりひてかへる舟　女性
〃　ほきの浪とうくよほーけ　なそこの舟ーおしわたるかも　旅人
〃　雲やこのみそまのよゐまもを梅みだれおんつるうも　巨勢豊人
〃千ぢ引の山坂ゐ　ゐまで白かしの枝もとをゝみ雪ぢれて八　波人
〃　矢田のゝ丸岐茅ちつく芳気仙郡の国雪ゐきくみるし
〃　松をまみ幼子をめぐ　ちうれ八雪もちうまる　〃
古　古さとい吉野の山ーをみぬ日ぬかたーー　〃
〃　けぬうよ又も降ーけまをまうちれ八みま梅よそこめ　〃



〃　白雪みちくけ八みやこのやまーなれうそちうける　要ゐ
〃　雪ふまゐ八そこうちせる号をまーまでーられぬ雪そ咲くる　〃
〃　雪ふりてくれ雨ゐねうそふれやうれぬ号八降ーけまをまう　〃
限　ふりてよえ八ふうみの山雪ぢれいまでそ心のちうれうべる　波人
〃　梅ふえよ降ーちうまをまき迎こめおもちまふかてる　〃
〃　ふる雪八さえてにおそうしくふりしかてる　〃
〃　雪梢の枝ゐ八ふりしかてにおそうしくふりしかてる　〃
梢　ふるかひのさきあらひえ白もちのさきあらひえ枝　〃
〃　ゐ千とのちうつけてそ平とおちうる限ーけ　〃
六　をとめあうひろみのゐ八打ひやうほーけ　雑雪
〃　梅そう限のふくにいつれうへし雪ぢれをとみうよそ雪ぢれ　〃

初雪　きうのよ

## 夕雪

ゆふされば
夕風寒き
夕暮に
ふるき
夕時雨の
夕やまもと

ゆふべの雪
ふれゝゝと
夕風寒き
夕暮に
ふるき
夕時雨の
夕やまもと

ゆふべの雪
ふれゝゝと
夕風寒き
夕暮に
ふるき
夕時雨の
夕やまもと

ゆふべの雪
ふれゝゝと
夕風寒き
夕暮に
ふるき
夕時雨の
夕やまもと



万十夕されハ夜ひとゝ云ふ句のふるき
装ひをもるゝと新古人のふるみ山の里の夕雪
詞めく和ら掛ふ作ら詞のわらひのふるき
新ふるゝ久ふるゝ山のねの新ふる
風つるゝ夕雪の句ふるゝ

## 夜雪

ゆきふれる
ふるさとの夜
おもふ夜
夜床さゆる
夜もすがら
ふりつゝ

ゆきふれる
ふるさとの夜
おもふ夜
夜床さゆる
夜もすがら
ふりつゝ

ねやの戸ゆふ
ふるさとの夜
おもふ夜
夜床さゆる
夜もすがら
ふりつゝ

万八ぬるよひのまたにやあれ
及ぬるものゝまたにやあれ

子　たえくても山ハ人めもかれぬらん月やかけてかはる白雪　仁和寺入道
〃　はるかなる野らのかけにも山への雪にもまた見えさりける　孝通
蘆　ほとりのまに雪ふかき野辺にすくし山家独りし雪の山下　為季

山雪

あしひきの山　八重山　百重山
高砂の尾上　さくひの山　かさねる山　新ちの山
桃の山　春の山　しけ山　なく山
ぬことえ細る　雪ます道　人きかし峰　峰も尾も
をとらのしらね　山のしらま　みよしの　山のかけ橋
万十里了引の山よ志るきハ白やとの時の中へかりしゆきかし　待人
重　雪かきハいやそらの山の橋にハましとおもかくれ峰よけり　阿闍
子　あしたへて山のしら雪つもれとも志らさ八越のしらねちらなり　通後



〃　しら山よ岸のらゆかり　萌えてきらめくよよ雪にならなら　永緒
〃　氷きてめてたの庭よ風さえみかねてそきさき峰の初雪　出雲院

野雪

山のかけせ　かりのへ　のへみ雪
野原　野中　きさらゆく　枯生のへ
みやきの里　関守のへ　ひちれあしみせ　笹の一
雪もりて　ねき　雪れたる　みよしの　すその原
野もちる　すゑ　小の細道　野への通路　野中の古
山　ゆきかけられもとはみかねまく　古世の雪わけハ雪のはふり　花経思
千　さら業苅るとの細路行きてつつ深くも雪れ野をやく　為季
凡　こらねよハなぬらへつやつかるらんの中の旅みのたちの初雪　内大臣
新拾　いとく又かれもり見えぬむさしのや天きらら雪れ明暮の空　良経の院

詞書自筆のまゝ

行路雪

仇来のそら　　野辺の山路
うき事の　　牛のよそを
里の中路　　あせの細道
憂路　　おろしのそら
　　雨後

降雪をふみそゝる人の楽けさ　純阿
〃　去ぬるとてみぐしに雪を降るまゝ　芝露
手　跡の松かつゝみをとゞめてもおくる人やみやこん　西住
〃　行水もくもるもすゝぐ心地して　寒窓
〃　降まじりなをや更ぬ夜半のさゝれ　雨声

湖ノ雪



汐ちそめ海　うらめ打　　拾やあま　　汐風そたつ
なみもれそふ海もと　雪のふるその〻一本の松の雪〻
名所　近江海　志賀の大つゞ　余吾の海〻
　　和歌の海あ打　　寄雪の海　　詞の海　作法

金　夜ふよ雪の浦を打ちかへしみるかひもなきうら歌
千　みなそこもかくれぬ山をみるかひもなきせバ屋ふを鈴志賀の浦波　名所
　　詞書はくそやうする所也雪をも志賀の風　名所

海邊雪　　浦雪

わすれ貝　　わたの底
浦わ　　浦のとまや
うつつのかさゝぎを　　波もひろふよ　　浦のまつ風

磯のうら雪　浦よりそちいそ山まで　波のまにまに雪よそふる

〃　波後の末　つもれ糸

〃　浜ちどりみだれて飛べる跡ぞこれ雪降りしきて波も見えわく

紀貫之　降雪よたくもれそらの好き給てはひくもるうら浦　古今集　雪

紀友則　里の海はなみの雪にうもれぬよりなきなぎさの雪ぞ白波

〃　つもる糸八十島白くなりぬらん雪降りしきて波も見えわく

## 都雪

壱の大納　降雪花の都も寒く　都も寒く　みさとの雪

金　散ふれて雪のあるじやまとき山の松の梢も雪ぬれくるとて　後京極



降る初雪もおちふれば小野山の松の炭竈もたきそ侘るる庭雪　お松

## 里雪

山もとのさと　ふるの雪　降つもる

降れ行里　里をこめ　里つき降　里もうく雪

右　白雪の降てつもれる山里ハすむにくさや岩ひき海ら苺　右勝

紫雪やふめどもふめどもおのくの庭もわれ　みえ

〃　袖かよふさと路ぬる社外のうつみの里の雪汀の新　家

和　降て来る雪ぬるもてや絶ぬん里ハ海さけさの雪　入ちかの木

寒　降くらしさとも山もうもれ行ふるさ　惹民

## 庭雪

掃そめを　庭のまばら

とハるめを　雪のまばこ

すべて庭の歌に新垣御垣

〃　松杉の高く茂みまもりやる　住人

河　まつ人の今もたえせぬ山のこゝろ世をしらであけくれ

〃　君が為かく法のこゝろも世をしらであけくれ

〃　君のため弥つるく出つるをとの枕よりとく人やこゝろん

山家雪　　山居雪

松垣　　隣まで

名所の山　　雪折の枝は　世のうきめこえぬ

つるまの帰　　雪ふる夜　みよとかけ

花の山　　竹をうる里　松を吹

外山のかね　　雪ふとうる　柴の庵



〃　まやまちくらもまちわびて訪ひこける人のすみっを　住荒

千　山里の庭ひろ雪ふりつもる跡なき道に　赤坂

〃　問ふをも都の人をもむかへ出ぬ　古屋

雪なからもまだ山の残り　雪間一　都の人よあそれとや　荒屋

〃　待人のこゝろやうめん　都の杉よ雪折ふるみち　荒家

松雪　雪まつほどの　枝ならし

庭おかん　枝を雪吹

ふゆる松風　下折のこる

山松ろえ　松のこゝろ

松の梢の　小松原

万八　池の上の松のこゝろは降雪を降けあけぬ人もこそ　住人

〃十 足引の山下したゝる光る向のきくしの小中川すしみゆき降るか 〃
同 松の葉にかゝる雪の外に散りこそ見え 時雨とはしらでかゝれ 〃
六 松の上に降りつむ雪はあし鶴の千世のゆきにきさきしれ家 〃
〃 白妙の雪にうもれて小松原きのみえぬかくれ哉 貫之

竹雪

竹に雪降つもる 竹に雪ふまる 竹の葉山
さく竹 しなひけ をれ竹 竹の葉なみ
竹の一むら 折ふし竹 なびき ようやく雪
雪折の音 雪をすゝむ 雪をうちはらふ 緑もとゞむ
竹林をやし たはむ 園生の竹 御垣の竹
千 降雪に竹その竹もうつもれて友こそなけれ宿の竹垣 隆信
〃 呉竹の折ふしごとに声するなる世の松原さへ雪をはらふて 為兼
爪 吹払ふ嵐は夜になる下折に雪も声する竹まき竹 伊平



樹頭雪 木に雪ふりつもる 雪のはなさかず

白かし 杉 松 椎 柴
木々の梢 枝もたわゝ 山の木末 柳の枝
正木の枝 みどりの色 梢の雪の山 梅原
すべて何の木にても名をあらはさずとも又ゆきそしてもよめり
万十 此雪の消えのこる時にはさきわれ山橘の実のつれも見む 家持
同 杉ちかく雪ふりまるは音せぬの杉をも見てとふ人もなし 読人しらず
〃 雪折の枝とわれひそ白雪は消ぬ限りは花と社みれ 〃
全 降雪に梢の里は埋まれて春ともみえて三輪の山もと 後成
新 みよしのゝ梢も雪の中は白ゆふかくる神かけひのことこそ 実白

○鷹狩

たか 鷹 ひとつ 大たか はいたか
山ふかくともかく鷹をあはせて鳥さへとらず木の葉のみ秋ぞ 言

はかけそる　そその社を
古て伊勢その他ひろめもよをそ
給古　己等のをそみの夜も月をそそて
給夜　そのそ社のあるふまの社そて
歌　久そ社月のそそのふ人そ
加次　そそめそのようそのそて神ふ社
〃　り新さんかまの末ひ
〃　佐人の指するれをそめよう
〃　をそめよう神ふをあ
給夜　て神をかりをそめよう
○神　樂　かぐら

十二月吉日を撰て内裏所そ
巻ノ二

よう行そ社十二月そそめそれ八一年後の注解よりそれ
つそそ内裏そ所の社改そそ行そと里かそそ
きそそ社そのそそそし舞をやふれ
そ拍　拍掌　枝笹　弓　鉾　鉾
幸束　社年ふ一そそをそ一そそのそうをとふるをそそそ又一そ
注史自一　打もそそ　小忌衣
もそゆ　大和琴
それそ神　笛の
雲そのそそめる　社代おゆる
出そその社そ先　そゆて
そそ打そ　新そそのそ
そゆそそ　打そ人そ
そ注束のそそ　あそそそよ